

総 説

子どもの運動・スポーツ実践を促すための保護者の行動に関する研究  
～スポーツ・コミットメントと行動分析学を応用した保護者モデルの構築～

馬 場 宏 輝

Research on the activity of parents to encourage the practice of sports and exercise by children  
-Building a parental model using sport commitment and behavior analysis-  
Hiroki Baba

This research considered the activity of parents to encourage their children's practice of sports and exercise in view of the paradigm of sport sociology, physical education and sport management, sport commitment, and behavior analysis. As a result, parents could be grouped into 8 types by using "energy, money and time" as a scale of their commitment and setting "sport equipment and gear," "sport facilities, apparatus and recreational equipment," and "sport programs" as reinforcement factors for the children.

Keywords

Parents, activity, sport commitment, behavior analysis, energy, money, time

## 1. はじめに

近年、子どもの体力低下を危惧した様々な取り組みが実施されている。2006年に改定されたスポーツ振興基本計画（文部科学省）では、「子どもの体力の低下は、将来的に国民全体の体力の低下につながり、生活習慣病の増加やストレスに対する抵抗力の低下など健康に不安を抱える人々が増え、ひいては社会全体の活力が失われる事態が危惧される」と、子どもの体力低下に言及し「家庭、学校、地域が連携して、子どもが積極的に外遊びやスポーツに親しむ習慣や意欲を培うことにより、子どもの体力の低下傾向に歯止めをかけ、上昇傾向に転ずることを目指す」と、その方向性を示した。現在、国レベルでは、スポーツ振興基本計画による政策

展開や学習指導要領の改訂、全国体力・運動能力・運動習慣等調査などが行なわれている。宮城県では、全児童・生徒へ体力・運動能力調査記録カードを配布したり、小学生の運動能力を伸ばすためのオリジナルエクササイズを開発する、といった取り組みが実施されている。全国の各学校においては、これまでも体育の授業や体力テストの実施、運動会といった行事等が実施されており、地域においてはスポーツ少年団の育成や総合型地域スポーツクラブの育成、青少年団体での取り組み、行政・学校・地域が連携した「放課後子どもプラン」のような取り組みもある。しかしながら、子どもの生活の基盤となる家庭と保護者に向けた取り組みについては、子どもの運動・スポーツ行動、成人の運動・

スポーツ行動といった視点を越えた、子どもにとっての保護者という視点からの理論的な背景となる研究や取組みが十分であるとはいえない。

今の子ども達は、塾やお稽古事に忙しかったり、核家族化や少子化で兄弟姉妹が少なかったり、安全に安心して遊ぶ場所が少なかったり、携帯型ゲームやカードゲームが子どもの遊びを屋外から屋内へと閉じ込め友達との遊びから個人の遊びへと変容させたりと、子どもを取巻く環境や状況は大きく変化してきている。また、「平成19年の犯罪情勢」（警察庁,2008）によると、子どもの犯罪被害件数は、304,685件あり、子どもが被害者となる割合の高い罪種は、略取・誘拐（69.6%）、強制わいせつ（52.5%）、公然わいせつ（46.1%）、強姦（43.6%）、恐喝（42.3%）となっている。たとえ地方であったとしても、子どもは外で自由に遊んでいれば良い、といっていられない時代になった。つまり、子どもが身体を動かすのは本能だからと、子どもの自主的・自発的な外遊びによって体力や運動能力を向上させることを期待するのは難しい時代である。もちろん、行政や学校での取組み、ボランティアが活躍する地域スポーツへの期待もあるが、子どもの成長に最も責任を持つべきは保護者である。子どもの生活の基盤となる家族、特に保護者の子どもに対する運動・スポーツへの積極的な関与が重要な要素であると筆者は考える。

そこで本研究では、子どもの運動・スポーツ実践を促すための、保護者の関わり方について、既存の理論をもとに、保護者の行動を類型化することを目的とする。

## 2. 子どものスポーツの現状

山本（2005）によると、子どものスポーツの現状は、「商業主義と大人文化による囲い込み運動、過社会状況にある子どもスポーツ、学校と地域の分離現象」の3点で特徴づけられるという。さらに、現代の子どものスポーツの特性

をおおよそ次の4つに要約している。

- ① 今日の子どものスポーツは、現代スポーツの論理に支配されており、結果としてスポーツ場面において合理的・効率的思考を強いられている。さらに、手段的能動主義によって子どもの文化や生活構造が解体される危機的状況にある。
- ② 自由競争の論理や勝利至上主義的価値が優性であることから、スポーツ集団内に強者・弱者の二重階層という構造的特性をもっている。
- ③ スポーツ集団の構造が固定的かつ権威的なことから、子どもの自己表現の機会を縮小化している。
- ④ スポーツ大会が広域化することで、現代スポーツを支配する価値は普遍化し、多面的価値をもち得ていない。

また、丸山（2000）は次のように述べている。

楽しく遊ぶためには、「遊びの時間」「遊びの空間」「遊びの仲間」という三つの条件が重要になる。すなわち、遊ぶためにはたっぷりとした時間がとれること、遊ぶ場所が自由に選べること、そして遊びを一緒に楽しめる多くの仲間が存在することである。今日では、子どもをとりまく環境の変化によって、この三つの条件はいずれも保障されないものになってしまった。特に、幼児期や小学校低学年において、母親としか一緒に遊ばない子どもが増加している傾向がみられ、遊ばない子、遊べない子が増えていると指摘されている。このように幼児期における様々な遊び体験の欠如が指摘される中、文部省は、幼稚園教育要領を全面的に改正し、「家庭の見直し」を強調するとともに、その具体的な項目として、改めて遊びの重要性をあげている。

園児の現状については、全国国公立幼稚園長会が2007年に実施したアンケートによると、国公立の幼稚園に通う子どもの14%は帰宅後、ほとんど屋外で遊ばず、30分未満が21%、30分以上から一時間未満が37%だった。また、子どもの成長や発達に、身体を動かす遊びが必

要と考える保護者は「そう思う」と「どちらかといえば」を合わせてほぼ全員に達し、98%が子どもの体力向上には親の役割が大きいと回答している。ところが、家庭で身体を動かす遊びの機会をつくっていると答えたのは77%に留まり、意識と実際の行動にギャップがあることが分かった。

### 3. 子どもの運動・スポーツ実践に保護者が関与する必要性

#### (1) トレーニングの原則

日本体育協会(2005)によると、体力を向上させるためのトレーニングの原則とは、「①全面性、②意識性、③漸進性、④個別性、⑤反復性」の5である。要約すれば、「偏り無く、トレーニングの目的や意識を理解し、負荷を少しずつ増やし、自分にあった負荷を、繰り返し継続する」ことである。子どもの体力が低下しているという現象は、これらの原則に基づいたトレーニングや運動が十分に行なわれていないということの意味するのだろう。トレーニング効果を高めるための具体的なトレーニング方法については本稿の中核的な課題ではないので割愛し、保護者が子どもの運動・スポーツをどのように継続させることができるのか、という点に絞って考察したい。

また、「青少年のスポーツライフ・データ2006」(笹川スポーツ財団,2006)によると、「運動・スポーツを実施している10代の保護者は、運動・スポーツをまったく実施していない保護者より、運動・スポーツの実施率が高かった」「保護者が運動・スポーツを実施している家庭環境にある10代の方が、実施していない家庭環境にある10代より、運動・スポーツを実施している」「保護者が運動・スポーツを実施している家庭環境にある10代の方が、実施していない家庭環境にある10代より、直接スポーツを観戦する機会がある」という調査結果がある。

また、馬場(2008)の行なった小学生の保護者を対象にした調査でも、体力・運動能力が高

いと思っている保護者ほど、子どもの体力・運動能力を把握し、子どもに運動・スポーツを推奨し、子どもの体力・運動能力が高いと考えている保護者像が明らかになっている。

#### (2) 生涯スポーツの児童期における子どもの運動・スポーツと保護者

日下(2003)は、「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について(保健体育審議会 答申,1997)」を引用し、豊かなスポーツライフの指針とライフステージ別生涯スポーツの実現方策について、次のように表現している(表1)。

また、日下(2003)は、「昔の子どもには、『家の手伝い』と『豊富な遊び』と『少しの勉強』があった。情報は少ないが豊富な経験があり、今の子どもには『冒険できるスリルのある場所』がない。『自然との遊び』があることすら知らない」と述べている。

また、子どもの遊戯世界を成立させるための条件整備として、その世界が成立するための時間・空間・仲間(3つの間)を確保・保障してやるのが重要であり、また、3つの場(家庭・学校・地域)と3つの間について次のように整理している(表2)。

#### (3) 体育・スポーツ経営学と子どもの運動・スポーツ実践

八代(2002)は、体育・スポーツ経営学について次のように述べている。

経営学というと経営者を中心とした経営をする側のための学問だと受取られやすい。しかし、体育経営学の創始者といえる宇土は、運動者という概念を提案しながら、体育・スポーツの経営や管理における運動者重視、運動者主導の重要性を一貫して主張し続けてきた。体育やスポーツの経営がもたらす運動者への効果や価値を最も重視してきたし、そこに豊かな運動生活というキーワードが持ち込まれた理由がある。体育やスポーツを、人々の幸せや喜びに結びつ

くように、その構造や過程を「人」に合わせていく、これが運動者主権、運動者主導であり、その普及や振興のバックボーンにこの考え方が存在すること、これが体育・スポーツ経営学の基本的な考え方である。

子どもを運動者として捉えた場合、子どもの運動者行動を促進させるために、スポーツ経営体がどのような資源を活用し、どのような事業を実施するかを検討することになる。しかしな

がら、子どもの運動者行動を促すには、特定のスポーツ経営体がスポーツ事業を実施するだけでは十分とは思えない。そこには、学校・家庭・地域の連携という視点が十分ではないからだ。学校・家庭・地域の連合体を一つのスポーツ経営体として捉えた場合には、学校では、体育の授業や課外活動等の運動・スポーツ機会があり、地域には公園や運動施設があり、入会の義務はないが、スポーツ少年団や総合型地域ス

表1 豊かなスポーツライフの指針とライフステージ別生涯スポーツの実現方策

	考え方	指針	豊かなスポーツライフ	運動・スポーツの楽しみ方	実現方策
児童期～12歳頃 小学校	スポーツ・ライフスタイルの「萌芽期」	ファミリーでスポーツを  生涯スポーツの基礎  スポーツとの出会い	生涯にわたる継続的なスポーツ習慣の基礎を培うとともに、文化としてのスポーツの出会いを大切にし、その担い手を育成していく。日常生活の中で親子の触れ合い、仲間との交流を深めながら伸び伸びと遊びや運動・スポーツ、自然の中での様々な活動に親しみ、運動・スポーツへの愛好心を涵養する。	スポーツの楽しさや喜びを味わうには簡易なルールでゲーム性に富んだ内容の工夫を図る。また、調整力を高めるためには、リズムカルな全身てきな運動や用具・遊具等を使った変化のある運動を親子や友達と工夫したり、協力して行う。	「児童期の望ましいスポーツライフ」 ・運動遊び、身近な自然 ・仲間や異年齢集団、豊かな社会性・人間性 ・さまざまな体験、「生きる力」、「基礎的な体力・運動能力・スポーツ」、「きつい」「かなりきつい」運動・スポーツ、 ・運動嫌い、体育嫌いにならぬよう、運動・スポーツとの「良い出会い」「楽しい出会い」 ・運動・スポーツクラブ

日下 (2003) 「生涯スポーツの理論と実際」 から抜粋、一部筆者が加筆修正

表2 3つの間と3つの場

	家庭	学校	地域
時間	子どもとコミュニケーションをとる時間	教育に関わる授業・授業以外の生活時間	遊びの時間
空間	子どもが生活の基盤として暮らす空間	学校の施設や設備	公園、広場、子どもの居場所
仲間	家庭を構成する家族としての仲間	教師、生徒	友達や、地域住民

日下 (2003) 「生涯スポーツの理論と実際」 から抜粋、一部筆者が加筆修正

スポーツクラブ、民間のフィットネスクラブ、スイミングクラブ等がある。学校や地域に運動・スポーツを実践する機会が全くないということはない。これだけの環境がありながら、子どもの体力・運動能力を向上させるための運動・スポーツが行なわれていないとすれば、社会的な問題もあるが、子どもの自主性・自発性に頼るといっている場合ではなく、保護者の意識・態度・行動が、エリヤフ・ゴールドラット（1984）のいう制約条件にあたり、子どもの運動・スポーツ実施におけるボトルネックになっている可能性がある。

さらに、一人の子どもにとっての運動・スポーツの継続化を考えた時には、特定のスポーツ経営体が各々実施する体育・スポーツ事業（エリアサービス、プログラムサービス、クラブサービス）の見直しだけでは、経営体や事業の枠組みをこえた、学校・家庭・地域の連携の中における、子どもの運動・スポーツの継続化を考えることは難しいだろう。

その為にも、保護者自身が子どもの運動・

スポーツに対してどのように向き合っていて、自分には何ができるのか、またどのような行動が子どもの運動・スポーツの継続に結びつくのかを理解するための理論的な枠組みが、保護者にとって必要だろう。

#### （４）スポーツ社会学における「スポーツ的社会化」

スポーツ社会学における、社会化研究の先駆者であるケニヨン（1939）は、スポーツの社会化（役割学習）を「個人的属性、社会的状況、重要な他者」の三つの主要な社会化要因から説明している。この社会化要因の一つである、個人の態度、行動に影響を及ぼす機能を持つものを、社会のエージェント（社会の担い手）と呼び、そのうちの主要なものが、「重要な他者」である。具体的には、両親、兄弟、友人、親戚、教師などがあげられる。さらに、ケニヨンらは、直接的スポーツ参加に関する社会化の研究において、社会的状況と社会化のエージェントの関連で、次のような仮説を導き出している（表3）

表3 社会的状況と社会化のエージェントの関連

① 家庭のスポーツ的社会化要因
1) 両親のスポーツへの直接的参加が大きいほど、子どものスポーツへの社会化の程度は大きい
2) 両親の価値体系の中で、スポーツが高い位置を占めるほど、子どものスポーツへの社会化の程度は大きい。

森川・佐伯（1989）「スポーツ社会学講義」から引用

#### （５）子どもの運動・スポーツとスポーツ・コミットメント

運動・スポーツ行動の継続化については、「スポーツ・コミットメント」という概念を用いて考えることができる。金崎（2004）は、スポーツ・コミットメントを「スポーツへの傾倒、執着、結びつきあるいはスポーツ行動やスポーツの集団や組織に自己を投入することを意味する。」と述べている。スポーツへのコミットメントが形成されていれば、その個人はスポーツとの関

わりが深いということになり、その人はスポーツをする可能性が非常に高いということである。スポーツとの最初の出会いはともかく、スポーツに参加することによって次第にスポーツへのコミットメントが形成され、それがスポーツの安定的な継続化につながるという。

スポーツ行動の継続化モデルによると、スポーツ・コミットメントは、子どもの頃からスポーツに関わりの深い親、あるいは兄弟姉妹がいる家庭にあって、スポーツを勧めてくれたり、

それを行うにあたって、励ましてくれたりした重要な他者が周囲に存在し、さらにスポーツの施設・場所といった条件に恵まれる中で、スポーツ活動を実施するようになる。これを継続的に経験していく過程において次第に形成されていくと考えられている。これは、単に今の子どもと保護者の関係だけではなく、子どものスポーツ・コミットメントが高くなれば、子どもが将来保護者となった時に、その子どものスポーツ・コミットメントを高める、という好循環も期待できる。

#### (6) 行動分析学からみた保護者の行動

杉山(1998)によると、行動自体を研究する学問である行動分析学の目的は、「行動」の「説明」「予測」「統制」であるという。なぜ、ある「行動」が生じるのか・生じないのかを「説明」し、どのような条件下で「行動」が生じるのか・生じないのかを「予測」し、実際に「行動」を生じさせる・生じさせないよう「統制」することであるという。また、行動分析学を応用したパフォーマンス・マネジメントにおいては、人間を「ラベリング」「分類」することを目的とはせず、あくまで「問題解決」を目的としている。そのアプローチ方法は、人間の心理、モチベーションなどのメンタルな部分に着目するのではなく、「行動」と「その結果」の関係に着目し、客観的・科学的に問題解決のためには何をすべきかを考えていく、というものである。

本研究は、子どもの運動・スポーツ実践を促すための、保護者の関わり方について、既存の理論をもとに、保護者の行動を類型化することを目的としているが、行動分析学は、人間を「ラベリング」「分類」することを目的とはしていない。一方で、本研究の重要な視点は、子どもの運動・スポーツ実践を促すための問題解決には、保護者のどのような行動が考えられるかである。保護者のタイプや子どもの運動・スポーツ実践へのアプローチが多彩であることを考えると、保護者の取りえる行動を類型化することは、保護者自身のタイプにより、どのような行

動を起こすことが重要なのかを明確にすると考えられる。

この行動分析学の考え方を応用すると、保護者が運動・スポーツをしたいか、子どもに運動・スポーツをさせたいか、という心理的な関わりではなく、保護者が運動・スポーツをするのか、子どもに運動・スポーツをさせるのか、という行動からの視点で考えることができる。さらに、行動分析学によると、なぜできないのかの理由は「やり方が分からない」と「やり方は分かっているが継続できない」の二つであり、行動は増やすか減らすかのどちらかしかない。行動を増やす手順を「リインフォース(強化)」と呼び、積極的なリインフォースとは、何かを与えることで行動を増やすことである。

スポーツ・コミットメントの概念と行動分析学を重ねて考えてみると、子ども自身の運動・スポーツに対する「やり方が分からない」と「継続できない」に、保護者がどのような行動をとるかであり、保護者自身が、子どもの運動・スポーツに対して「どのように関わって良いのか分からない」「継続できない」のでは、子どもの運動・スポーツ実践を促すことはできない。子どもの「継続できない」については、子ども自身のスポーツ・コミットメントを高め、リインフォースのための保護者の関与が必要であり、保護者の「継続できない」については、保護者自身のスポーツ・コミットメントを高め、リインフォースのための社会の仕組み(行政・学校・地域・家庭の連携した取組み)が必要であろう。そこで、本稿では、子どものスポーツ・コミットメントを高めリインフォースのために、保護者はどのような行動を取れば良いのかを、スポーツ・コミットメント尺度とリインフォース要因を用いて検討したい。

#### 4. 保護者がとるべき行動

ここまで、なぜ、子どもの運動・スポーツに保護者が関与しなければいけないのかについて、スポーツ社会学や体育・スポーツ経営学、

スポーツ・コミットメント、行動分析学の理論的枠組みを背景に検証してきた。そこで、その中から保護者が容易に理解できるキーワードを用い、保護者がどのような行動をとることが望ましいのかを理論的に類型化していくものとする。

### (1) 保護者のコミットメント尺度

スナイダーとスプライツァーは、スポーツへの時間とお金とエネルギーの投入意志によってコミットメントの程度が決まり、これがスポーツ参与の程度を規定するというモデルを提示している。要するに、コミットメントは時間とカネとエネルギーの投入傾向によって把握できるとするものである。この考え方を、人がどのようにスポーツにコミットするのかではなく、保護者がどのように子どもの運動・スポーツに対してコミットするのかに応用し、保護者の行動にどのように結びつくのかについて考えてみる。

#### ①時間

時間を、保護者が子どものために費やす時間であると考えてみると、単に一緒に過ごすというだけでなく、希望する場所までの移動時間と捉えることが出来る。つまり、子どもを運動させるために、保護者が連れていきたい施設、もしくは子どもが運動するために保護者に連れて行って欲しい施設、と捉えることができる。この施設を一般的な「公園や運動場」と捉えると、公園や運動場の器具や遊

具が充実しているかどうかという点も含まれてくることになる。

#### ②カネ

カネを、保護者が子どものために支払うカネであると考え、子どもに小遣いとして与えるカネではなく、運動・スポーツをするために必要なカネと捉えることができる。ここでは利用料金やクラブ会費だけではなく、運動・スポーツをするために必須となる道具や用具を購入する代金と捉えることもできる。

#### ③エネルギー

エネルギーを、保護者が子どものために費やすエネルギーであると考え、単に消費する熱量としてのエネルギーではなく、活動の源として保持する力や活気と捉えることができる。つまり、子どもと運動・スポーツをする、もしくは子どもが運動・スポーツをするための遊び方といった知識や工夫・応用力、一緒に運動・スポーツを実践する仲間（遊び相手）と捉えることができる。

これらにより、コミットメント尺度としての「時間」「カネ」「エネルギー」を、保護者の行動として「連れて行く」「購入する」「一緒に費やす」に変換することにより、子どものリインフォースとなる、「施設・器具・遊具」「道具・用具」「遊び方・仲間」に置き換えることができる（表4）。

表4 コミットメント尺度とリインフォース要因

コミットメント尺度	保護者の行動	子どものリインフォース要因
時間	連れて行く	施設・器具・遊具
カネ	購入する	道具・用具
エネルギー	一緒に費やす	遊び方・仲間

## (2) 子どものリインフォース要因

保護者が、子どものスポーツ・コミットメントのレベルを上げるためのリインフォースの要因を、「施設・器具・遊具」「道具・用具」「遊び方・仲間」として図に表したのが、図1である。

### ①施設・器具・遊具（時間）

「施設・器具・遊具」とは、専用の施設や付帯設備としての器具・遊具のことであり、アクセスの利便性や利用料金等を総合的に捕らえたものである。縦軸の下位は、専用の施設や器具・遊具を必要としない、ウォーキングや空き地で鬼ごっこをすることなどがあげられる。次に上位に位置するのは、公園である。砂場とブランコのみといった小規模の公園の上位に、面積が広く、遊具や器具が充実した公園がある。また、市営・県営の公園であっても、レストラン・売店等が充実した有料の施設があり、これは無料の公園に比べて上位に位置づけることができるだろう。一般的に、小さな公園は比較的狭い生活圏に、大きな公園は広域圏を対象とするものだが、これはどこに住んでいるのかや、公園や遊具等を設置・整備する行政努力の問題等が加味されることになる。国土交通省の調査(2007年)によると、都市公園は全国で93,227箇所あり、その内の住区基幹公園は81,416箇所である。これに、「道具・用具」の横軸を考慮するならば、鉄棒やうんてい、ジャングルジム等は、遊具が整備されていれば、運動が出来る服装さえしていれば、特に道具や用具を持参しなくても遊ぶことができる。水遊びのできる公園や砂浜では、服のままでも水遊びが楽しめるが、プールで泳ぐには、水着やゴーグルを持参する必要がある、「道具・用具」の制約を受ける。一方で、アイススケート場でスケートをするには、アイススケートの専用リンクが必要であるが、スケート靴は水着と異なり、大よそのリンクで貸し出しをしており、専用の用具を持参しなくてもスケートを楽しむことができる。しかし、施設数ではプー

ルが全国に沢山ある(38,665施設：文部科学省調査,2004)のに対して、アイススケート場は公共というよりも商業スポーツとして営業しているケースの方が多く、さらに圧倒的に施設数が少ない(245施設：文部科学省調査,2004)。

なお、体育・スポーツ経営学では、体育・スポーツ経営体が、「施設・器具・遊具」を用いて運動・スポーツをするための条件整備を体育・スポーツ事業として行うものを、「エリアサービス(A.S)」と呼んでいる。

### ②道具・用具（カネ）

「道具・用具」とは、運動・スポーツをするための道具・用具の有無であり、入手困難性、購入金額、汎用性などを総合的に捕らえたものである。例えば、子どもがゴムとびをするためのゴムはゴムとび専用というよりも、様々な用途に汎用性があり、比較的安価で専門店でなくても購入できる。次に右に位置するのは、比較的安価でスポーツ店や玩具店等で購入できるなわとびやボールである。さらに右に位置するのは、気軽に購入する消耗品というよりも、子どもの成長段階に応じて買い換える必要があり、比較的値段を気にする備品的なローラーブレードや一輪車、自転車等があげられる。

これに、「施設・器具」の縦軸を考慮するならば、ゴムとび、なわとびは身体を動かすわずかなスペースがあればどこでも出来るが、ボール遊びは、安全性の確保という点で、縦軸の少し上位に位置し、ローラーブレードは専用リンクでなくても遊べるが、芝生ではタイヤが回転しないことからアスファルト等の路面が必要である。自転車は遊び場所までの移動手段として考えれば施設・用具に限定されないが、運動・スポーツとして自転車に乗る場合は、ある程度スピードを出しても危険ではないスペースの確保が必要となる。一輪車の場合は、付き添う人がいれば比較的どこでも遊ぶことができるが、一人で練習する



には手すり等がある公園でなければ遊ぶのは難しい。道具・用具に関しては、近年の科学技術や生産技術の進歩により、これまで無かった新しい道具・用具の開発や、高機能で高付加価値なもの、同じ機能でも低価格なもの、といったようにカネを出す保護者だけではなく、スポーツメーカーや玩具メーカーの努力も加味されなければいけないだろう。

### ③遊び方・仲間（エネルギー）

縦軸の「施設・器具・遊具」、横軸の「道具・用具」の中間に、「遊び方・仲間」を位置づけることができる。「施設・器具・遊具」と「道具・用具」との関係を検討すると、保護者にとっての「遊び方・仲間」とは、時間とカネの代替としてエネルギーを費やすことである。これを縦軸と横軸のベクトルに合わせるためには、「遊び方・仲間」と対極を成す、保護者以外のエネルギーによる子どもにとってのリインフォースを設定しなければいけない。そこで、遊び方を「内容と指導者」に、仲間を「保護者以外の仲間」とすると、「プログラム」に置き換えることができる。これは、体育・スポーツ経営学のプログラム・サービス(P.S)の理論を応用したものである。八代(2002)によると、体育・スポーツ経営学におけるプログラム・サービスとは、「運動の成立・維持に働きかけるための“運動の機会”を整える営みであり、プログラムとは、運動の機会を構成する“時間の条件”と“内容の条件”とが結合されたものである」と説明している。「道具・用具」とは、「何をするか」を制約することから「内容」と置き換えることができるだろう。これにより、縦軸と横軸を合成したベクトルを「プログラム」とすることができる。

### ④プログラム

より上位のプログラムとは、特定の参加者が特定の場所で、特定の時間に決められた内容を定期的・継続的に実施するというように

なる。これは体育・スポーツ経営学における、「クラブサービス(C.S)」にあたり、スポーツ経営体から維持・発展を支援されるスポーツクラブとすることができる。このベクトルの特徴は、左下に移動するほど保護者と子どもの自由度が高く、右上に移動するほど、保護者と子どもはスポーツ経営体による制約を受けるという点である。

高梨(2000)のナレッジマネジメントの理論から、この「エネルギー」と「プログラム」の関係を捉えると、保護者のエネルギーは、個人に内在するものであるから「個人知・暗黙知」であり、スポーツクラブ等のプログラムは、事業として展開されていることから、対極となる「組織知・形式知」と捉えることができる。

この「プログラム」をもう少し分解してみると、「施設・器具・遊具」もしくは「道具・用具」に、その特徴を分類することができる。左下は、特定の道具・用具を必要とせず、施設・器具にも制約を受けない運動である。かけっこや鬼ごっこ、だるまさんが転んだ等、本来は子どもたちが知恵を絞ったり、代々伝承されてきた遊びである。これが右上に移動すると、缶けりやゴム跳び、なわ跳び等、比較的手軽に手に入る消耗品的な道具・用具を、最低限必要なスペースを確保して遊ぶことになる。

さらに、プログラムとしての要素を加味するならば、ルール、指導者、仲間といった、保護者と子どもだけでは整備できない、行政等が提供するスポーツ教室や運動会等に参加することが考えられる。これは、内容や場所、指導者等は行政等が提供してくれるが、参加したい(参加できる)教室が提供されるのかどうか、参加したい(参加できる)曜日や時間に設定されているのか、参加したい(参加できる)頻度で開催されるのか、といった家庭の都合では変えられない制約も多くなり、自由度が減る。さらに上位に位置するものには、比較的生活圏や身近な公共スポーツ施設等を活用し、クラブ会員としてスポーツを実

施する総合型地域スポーツクラブやスポーツ少年団等が考えられる。不定期に開かれるスポーツ教室よりも、定期的に自分が希望するスポーツを選択し継続的に運動・スポーツをすることができる。しかし、スポーツ教室と比較すると一般的にクラブ会費等の費用がかかり、参加するスポーツの道具・用具を揃える必要があり、クラブがプログラムを行うための指定された場所に行かなければならない。スポーツ教室等と同様に、自分では整えられない環境が整っているが、スポーツ教室以上の制約が加わり自由度はさらに減る。

プログラムの最上位に位置づけられるのは、民間のフィットネスクラブやスイミングスクール、体操スクール等であろう。良質のプログラムと指導を受けられる一方、高額な会費が必要であり、生活圈等に関係なく、指定された特定の施設に通う必要がある。移動

については、スクールバスがあればカネで解決する場合もある。プログラムに関しては、民間フィットネスクラブの経営努力や、行政や地域による総合型地域スポーツクラブ育成の努力、研究・教育機関による子どもの運動・スポーツプログラムの開発といった努力も加味されなければいけないだろう。

また、このプログラムというベクトルは、横軸の「道具・用具」と縦軸の「施設・器具・遊具」を掛け合わせたものであることから、「施設・器具・遊具」と「道具・用具」とは、それぞれ方法は異なるが、子どもが運動・スポーツをするための「プログラム」や「内容」を内在しているということができる。左下に移動するほど、物は無いが自由度が高く、右上に移動するほど、プログラムは充実しているが限定的で自由度が低くなると考えられる。

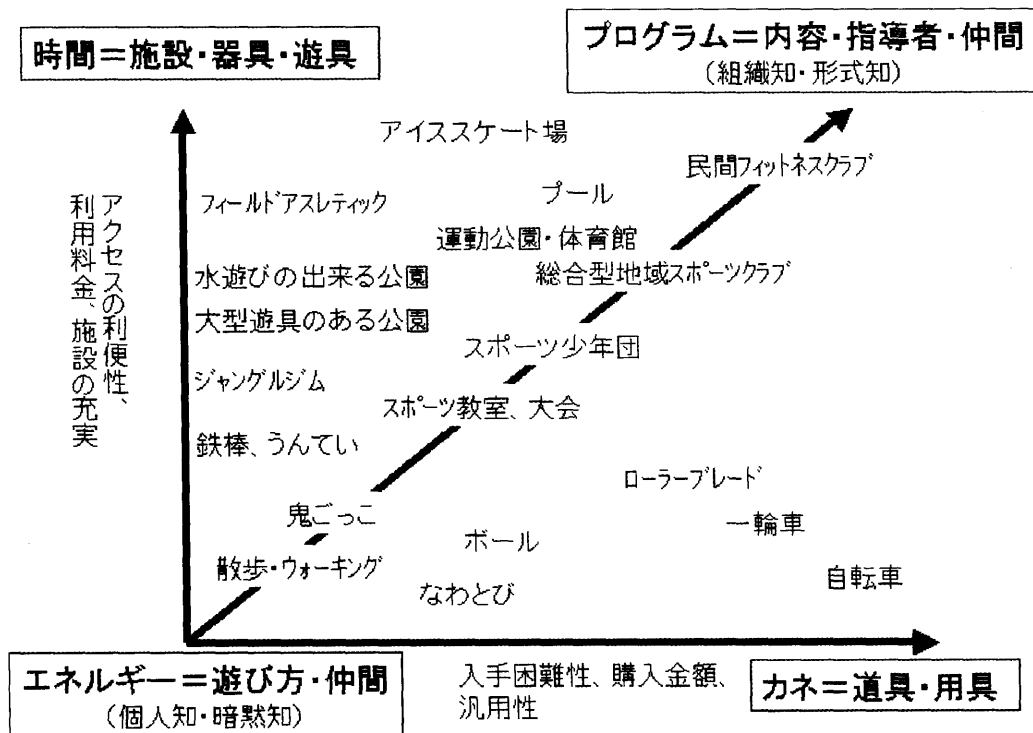


図1 保護者のコミットメント尺度と子どものリインフォース要因の関係

### (3) 子どもの運動・スポーツ継続化のための保護者の行動

前項では、子どもと運動・スポーツの関わりを、「施設・器具・遊具」、「道具・用具」、「遊び方・トレーニング法、仲間」というリインフォースの要因から分析した。次に、それぞれの要因に対する保護者の行動について詳しく分析してみる。

#### ①施設・器具・遊具

「施設・器具・遊具」に関して保護者すべきことは、その場所まで連れて行くという「行動」であり、連れて行くという「時間」が必要になる。一般的に小さな公園は、比較的狭い生活圏を対象とした身近なところに設置され、大きな公園は広い生活圏を対象とした比較的郊外に設置され、大きな公園ほど、器具や遊具が整備されていることが多い。まれだが、フィールドアスレチック等が整備されている公園もある。また、ローラーブレードや一輪車など、様々な用具・道具を使って遊ぶ可能性を秘めている。プログラムとの関わりでは、小さな公園は、身体を動かす最低限のスペースは確保できるが、器具や遊具の少なさから、運動を充実させるために、保護者は道具や用具を購入して運動をするか、遊び方そのものを教えたり、遊び相手として一緒に身体を動かす必要がある。もし、身近に公園があれば、移動に時間がかからなかったり、安全性の確保を担保した上でだが、子どもだけでも公園に行くことができる。大きな公園の場合は、遊具や器具が充実していることから、移動に時間がかかったとしても、保護者が関与するというよりも、子どもは自分で遊具や器具を使って身体を動かすことができるだろう。遠くまで移動し、尚且つその場にいななければいけないということは、偶然近くにこういった公園がある場合は幸運だが、それだけ保護者は時間的にも空間的にも拘束されるということにもなる。

また、単なる公園ではなく、特定のスポー

ツを行うための施設で運動・スポーツをする場合には、生活圏とは関係のない専用の施設に連れて行く必要があり、また専用の道具・用具を買い揃える必要がある。水泳やアイススケートといった、水中・氷上という日常生活の延長上にない、特殊な技能を必要とする運動・スポーツの場合は、技術指導をしてくれる指導者がいない場合、ある程度上達するまでは、保護者自身が子どもの技術指導をする必要があり、保護者が対応できる技術レベルを超えた後のことも考えなければいけない。子どものリインフォースを考慮すると、いつも同じ場所、同じ遊具・器具では、飽きが生じ「継続性」が確保出来なくなることも予想される。拘束時間以外にも、どこにどのような施設あるのかを探すことも必要となる。

#### ②道具・用具

「道具・用具」に関して、保護者が出来ることは、遊び・運動・スポーツに応じた「道具・用具」を購入するという「行動」であり、購入するための「カネ」が必要である。しかし、ここで保護者が考慮しなければいけないことは、単に金額が高いか安いかだけではなく、その道具・用具が、子どもの発育発達や技能レベルに応じた安全なものなのか、その道具・用具が使える場所があるのかといったことである。横軸の右に移動するにしたがって、高価であったり、大型であったり、保管が困難であったり、特定の遊びや運動・スポーツに限定され汎用性が乏しかったり、ということが考えられる。子どものリインフォースを考慮すると、いつまでも同じものでは飽きが生じることも予想されるので、現在興味を持っているものだけではなく、子どもが次の段階として興味を持ちそうなものを探すことも必要となる。

#### ③プログラム

プログラムの最も最上位に位置するのは、

民間のフィットネスクラブやスイミングクラブ、体操スクールである。保護者に求められるのは、プログラム応じた年会費・月会費、場合によっては、クラブ専用の用具・道具を購入するという「行動」であり、「カネ」を必要とする。また、生活圈や居住地とは特に関係のない特定の施設への送り迎えをするという「行動（スクールバスというカネに代替できる場合もある）」や、移動や拘束時間が必要となる。また、入会に際して、同一エリアで同業の競合するようなクラブがある場合や、どのような競技（種目）のクラブに入会するかという保護者自身のリサーチや比較検討する手間が必要となる。総合型地域スポーツクラブに入会した場合には、保護者は、民間のフィットネスクラブと違い、クラブ会費は比較的低料金であり、比較的身近な公共スポーツ施設を拠点として利用しているが、ボランティアとして保護者が協力するという「行動」が必要になる。「カネ」と「時間」が減った分、ボランティアとしての「エネルギー」が増す。しかし、運営主体としてクラブに関わることで、保護者の都合で会場を選定したり、活動内容を決めたり、活動の頻度・時間を変えることが可能になり自由度が高まる。

次の段階で保護者に求められるのは、専用の道具・用具というよりも、手軽に手に入る汎用性の高い物を使って子どもと一緒に運動する、もしくは、施設にある遊具や器具を使って、子どもと一緒に運動するという「行動」である。道具・用具を使うといっても、正式な競技ルールに従って行うのでなければ、場所や子どもの体力・運動能力、興味・関心に応じて、遊び方を工夫する必要がある。十分な遊び・運動を引き出すには、十分な工夫が必要であるともいえる。施設にある器具や遊具を使って遊ぶ場合でも、遊び方一つで運動効果は大きく異なる。「道具・用具」、「施設・器具・遊具」の双方で、保護者の「遊び方・仲間」に対応した行動が求められる。さらに次の段階では、道具を使わずに、場所も

近所の小さな公園等で、親がどのようにすれば、安全を確保し、楽しく遊ぶことができるのか考えるという「行動」である。道具や用具、遊具や器具を用いないということは、前述以上の「遊び方・仲間」に対応した行動が求められる。

最終段階では、遊びや運動をする時間や場所すら限定しない。例えば、一日の中の何気ない時間でも「今日は何をして遊んだのかな」「体育でどのような運動したのかな、何が出来るようになったのかな」と話しかけ、アドバイスをしたり遊び方を教えるという「行動」である。身体運動をほとんど伴わず、会話の中で運動・スポーツを伝えるには、単なる遊び方や工夫に留まらず、身体運動やスポーツ医・科学に関する幅広い知識が求められる。

## 5. 子どもの運動・スポーツ実践への保護者の関与モデル

これまで、「時間」「カネ」「エネルギー」を保護者のコミットメント尺度とし、「道具・用具」、「施設・器具・遊具」、「プログラム」を子どものリインフォース要因として、子どもの運動・スポーツ実践への「保護者の行動」について分析してきた。このうち、保護者のコミットメント尺度から保護者をタイプ別にすることで、保護者が子どもに対して、どのように関与できるのかを類型化したのが、表5である。この類型化により保護者を8つのタイプに分類し、保護者の取るべき行動を示した。

タイプ1は、保護者が子どもに「エネルギー、カネ、時間」の全てを費やすことができるタイプである。子どもにとっては、全てのリインフォース要因を兼ね備えている、理想的な保護者像であるといえるが、一人で全てを実現するのは現実的には難しいだろう。

タイプ2は、保護者が「エネルギー、カネ」を子どもに費やすことができるタイプである。仕事等で忙しく、時間に融通が利かない一般的な保護者像を思い浮かべることができる。この

表5 子どもの運動・スポーツ実践への保護者の関わり方モデル

タイプ	エネルギー	カネ	時間	保護者のとるべき行動
1	○	○	○	子どもの興味・関心、発育・発達に応じて、遊び方を教え、運動するための用具・道具を購入し、運動・スポーツが出来る施設に連れて行き、興味のあるクラブに入会させる。
2	○	○	×	子どもの興味・関心、発育・発達に応じて、遊び方を教え、運動するための用具・道具を購入し、興味のあるクラブの中でも、身近で自力で通える、もしくは送迎サービスのあるクラブに入会させる。
3	○	×	○	子どもの興味・関心、発育・発達に応じて、遊び方を教え、器具や遊具の充実した運動・スポーツが出来る施設に出来るだけ頻繁に連れて行き、体力・運動能力を高めるような遊び方を工夫する。
4	×	○	○	保護者のアドバイスや指導を必要としない、子ども自身が自ら工夫した運動・スポーツが出来るような用具・道具を購入したり、とにかく子どもの興味・関心のあるクラブに入会させる。また、運動・スポーツに関する知識・技術、工夫を身に付け、タイプ1に近づく努力をする。
5	○	×	×	子どもの興味・関心、発育・発達に応じて、子ども自身が自ら工夫した遊びが出来るような遊び方を教え、比較的用具・道具を必要とせず、参加料の安価な、行政等の行う身近なスポーツ教室やイベントに参加させる。
6	×	○	×	保護者のアドバイスや指導を必要としない、子ども自身が自ら工夫した運動・スポーツが出来るような用具・道具を購入したり、子どもの興味・関心のあるクラブの中でも、身近で自力で通える、もしくは送迎サービスのあるクラブに入会させる。また、タイプ2に近づく努力をする。
7	×	×	○	器具や遊具の充実した運動・スポーツが出来る施設に出来るだけ頻繁に連れて行き、遊ばせる。また、タイプ2に近づく努力をする。
8	×	×	×	まずはタイプ4、タイプ6、タイプ7に近づく努力をする。 ※このタイプ8をなくすために、学校・家庭・地域・行政・メーカーは連携しなければならない。

場合、時間をカネで代替できるサービスを購入することが出来れば、よりタイプ1に近づくことができる。

タイプ3は、保護者が子どもに「エネルギー、時間」を費やすことができるタイプである。低所得者層というよりも、家計の配分の中で、運動・スポーツの種類や内容を限定するような道具・用具の購入に積極的でない保護者像を思い浮かべることができる。十分な時間をかけて、自前で準備しなければいけない道具・用具に限定されない、運動・スポーツ実践の工夫をすることで、よりタイプ1に近づくことができる。

タイプ4は、保護者が子どもに「カネ、時間」を費やすことができるタイプである。子どもの運動・スポーツ実践を促す可能性は十分に備え

ていながらも、自分自身に、子どもと一緒に遊ぶための知識・技術、工夫が不足しているタイプである。一流の指導者である必要はないことから、運動・スポーツに関する知識・技術、工夫を身に付けることで、よりタイプ1に近づくことができる。

タイプ5は、保護者が子どもに「エネルギー」を費やすことができるタイプであり、最も一般的なタイプである可能性が高い。子どもの運動・スポーツ実践に否定的なわけではないので、子どもの自主的・自発的な運動・スポーツ実践を促すような工夫をするとともに、行政やスポーツ団体等が提供するスポーツサービスを利用することで、子どもの運動・スポーツ実践を促すことができる。

タイプ6は、保護者が子どもに「カネ」を費やすことができるタイプである。子ども自身が自ら工夫した運動・スポーツが出来るような用具・道具を購入したり、子どもの興味・関心のあるクラブの中でも、身近で自力で通える、もしくは送迎サービスのあるクラブに入会させることで、子どもの運動・スポーツ実践を促すことができる。一流の指導者である必要はないことから、運動・スポーツに関する知識・技術、工夫を身に付けることで、よりタイプ2に近づくことができる。

タイプ7は、保護者が「時間」を子どもに費やすことができるタイプである。器具や遊具の充実した運動・スポーツが出来る施設に出来るだけ頻繁に連れて行き、遊ばせることで、子どもの運動・スポーツ実践を促すことができる。一流の指導者である必要はないことから、運動・スポーツに関する知識・技術、工夫を身に付けることで、よりタイプ3に近づくことができる。

タイプ8は、保護者が子どもに対して何のリインフォース要因も提供できないタイプである。この場合、子どもの運動・スポーツ実践に対して、危機意識を持っているかどうか重要な点になるが、保護者が取るべき行動として、タイプ5、タイプ6、タイプ7に近づく努力をすることで、子どもの運動・スポーツ実践を促すことができる。具体的には、保護者が子どもに対して、「エネルギー、カネ、時間」のいずれを費やすことができるのかを熟慮し、具体的な行動に移すことである。一方で、保護者のタイプ8をなくすために、学校・家庭・地域・行政・メーカーは、連携・協力しなければいけないだろう。

しかし、これらに示した行動を取れば保護者の役割は終わりというわけではない。これは、子どもにとっても保護者にとっても、単なるきっかけにすぎない。つまり、保護者自身の「やり方が分からない」が解消したに過ぎない。タイプ5でワンパターンな遊びのままでは、子どもは物足りなくなってくるだろうし、タイプ4のままでは、スポーツコミットメントレベルを

高めるための「保護者とのスポーツ経験」が欠けたままの状態である。タイプ8のような「やり方が分からない」保護者のためにこそ、この類型化モデルが構築されたといっても過言ではない。さらに付け加えるとすれば、この類型化は、保護者個々人がどのタイプに当てはまるかという視点で捉えるだけではなく、父親、母親、祖父、祖母といった家族構成全体で捕らえることもできる。そうすることで、お互いに不足している部分をカバーし、より子どもの運動・スポーツ実践を促すリインフォース要因を総合的に高めることが可能になる。

また、子どもの運動・スポーツの継続化を確保するためには、保護者自身が子どものリインフォース要因の変化にどのように対応しなければいけないかを常に考える必要がある。

## 6. 保護者のスポーツコミットメントレベルの向上

前項では、子どもの運動・スポーツ実践への保護者の関わり方を、「エネルギー、カネ、時間」によってタイプ別に類型化することができた。子どものスポーツ・コミットメントの形成とリインフォース（ここでは子どものスポーツ行動の継続化）を考える場合、金崎（2004）は、スポーツ・コミットメントの形成に影響を及ぼす過去のスポーツ参与として、「本人のスポーツ経験、親とのスポーツ経験、兄弟姉妹とのスポーツ経験」を明示している。さらに、スポーツ・コミットメントの特徴として、「スポーツの技能を向上させることがスポーツ活動を実施したり継続したりすることにつながる。いかに喜びを味わえるか。自分がスポーツをすることを期待している重要な他者がいると思っている。運動部その他のスポーツクラブに所属すること」も明示している。子どものスポーツ行動の継続化や運動・スポーツの実践、体力の向上を願うのであれば、保護者は、子どもに対して無関心ではいられない。意識を持つだけではなく、重要なのは「保護者の行動」であり「子どもとのスポー

表6 行政、学校、地域、家庭、メーカーの行動

	エネルギー／遊び方・仲間	カネ／道具・用具	時間／施設・器具・遊具
行政	啓発・研修、スポーツ教室、イベント、情報提供、指導者の派遣	道具・用具の拡充、クラブへの助成	施設の整備、器具・遊具の充実
学校	運動行事、運動部活動の活性化、PTA活動、子どもの現状を伝える	道具・用具の拡充	学校開放等の推進
地域	総合型地域スポーツクラブ等の育成	再利用可能な道具・用具のリユース	ボランティアスタッフの配置
家庭	家庭内での家事等の分担、ご近所付き合い、現実を受け止め危機感を持つ、運動・スポーツに興味を持つ	再利用可能な道具・用具のリユース、家計支出の優先順位の見直し	ボランティアスタッフとして協力、趣味と子どもにかける時間の優先順位の見直し
メーカー	新しい遊びを誘発する新商品の開発	魅力ある機能的な商品の開発低価格商品の開発、購入のしやすさ、販売網の拡充	耐久性、安全性の高い器具・遊具の開発

ツ経験」である。保護者の行動の結果として、子どものスポーツ・コミットメントが形成され、子どものスポーツ行動が継続化すると強く認識すべきだろう。たとえ十分なエネルギーが保護者にあったとしても、子どものリインフォースを考慮すると、保護者の能力を越えた運動・スポーツ経験を得るためには、カネと時間を提供してスポーツクラブ等に入会する必要も出てくるだろうし、子どもの運動・スポーツの技能レベルの向上に応じて、保護者自身が身体運動やスポーツ医・科学について学ぶ必要も出てくるだろう。

そこで、保護者自身のスポーツ・コミットメントレベルを高め、保護者自身のインフォースに影響を与えられる、行政、学校、地域、家庭、メーカー（スポーツ、玩具）が、それぞれ「遊び方・仲間」、「道具・用具」、「施設・器具・遊具」に対して何ができるのか、つまり、保護者のスポーツコミットメントの尺度となる、エネルギー、カネ、時間、に関してどのような行動が出来るのかについて整理したのが表6である。

## 7. まとめ

本研究では、子どもの運動・スポーツ実践を促すための保護者の行動を、スポーツ社会学や体育・スポーツ経営学、スポーツ・コミットメント、行動分析学の理論的枠組みを背景に考察を行った。その結果、保護者のコミットメント尺度として、「エネルギー、カネ、時間」を用い、子どものリインフォース要因として、「道具・用具」、「施設・器具・遊具」、「プログラム」を設定することにより、保護者を8つのタイプに類型化することができた。この「保護者のコミットメント尺度と子どものリインフォース要因の関係」に基づく「子どもの運動・スポーツ実践への保護者の関わり方モデル」という8つのタイプの類型化は、保護者の子どもの運動・スポーツに対する意識や行動を劇的に変えるものではない。むしろ保護者自身が今、子どもの運動・スポーツに対してどのように関わっているのかを知り、どのような「行動」を取ることが望ましいのかを導く指針や方向性を示すものである。

## 8. 今後の課題

本研究により、保護者と子どもの関わりについて「行動」という視点から整理することはできたが、保護者自身の心理的状态としての、子どもに対するコミットメントについて言及することが出来なかった。この点については、子どもにとっての保護者のように、保護者にとっての行政・学校・地域・家庭・メーカーという視点から、どのような「行動」が、保護者のコミットメントを強めるリインフォースになるのかといったさらなる研究が必要だろう。その際には、保護者が積極的に関わるようになるリインフォースと、消極的だが強制的に関わらせる罰やペナルティといったリインフォースの両方の視点が必要だろう。

本研究では、保護者がエネルギーを使わずにカネと時間を費やす子どものスポーツの関わり方として「民間フィットネスクラブ」をあげた。マクファーソンは、「しつけ教育としてのスポーツ」と「管理教育としてのスポーツ」の二面性が強い子どもを対象とした各種スポーツクラブや教室は、子どもの社会化にとって多くの問題を内在している、と指摘している。常に大人を意識した子どものスポーツ活動は、自主性・自発性に欠け、創意工夫する活動が少ないことが指摘できるとし、試行錯誤を繰り返しながら社会化されていく子どもの活動としては、大きな疑問を持たざるをえないという。大人が大きく関与する子どものスポーツ活動を見れば、問題の自主的解決能力、主体的・創造的活動能力の乏しい子どもの育成に努め、社会の進歩や変革に主体的に行動、参加できない要因を、子どものうちから社会化しているといっても過言ではない。また、菅原（2000）は、つかみ損なったボールの「小さな危険」が、自動車や火災、病気など「大きな危険」の事故・危機に冷静に対処できる一助になると述べ、ジュニア期の指導に「小さな危険と大きな安全」という標語を掲げている。保護者が何も考えず、単にカネと時間があり、管理されていて安全・安心だからと、

とりあえずスポーツクラブに入会させておけば良いという考えには、警鐘を鳴らさなければいけないだろう。

## 【引用・参考文献】

- 1) 石井淳（2007）短期間で組織が変わる行動科学マネジメント
- 2) エリヤフ・ゴールドラット・三木本亮訳（2001）ザ・ゴール
- 3) 金崎良三（1995）青少年のスポーツ・コミットメントの形成とスポーツ行動の継続化に関する研究. 体育学研究 39 : 363-376
- 4) 金崎良三（2004）生涯スポーツの理論
- 5) 日下裕弘・丸山富雄・加納弘二（2003）生涯スポーツの理論と実際
- 6) 警察庁（2008）平成 19 年の犯罪情勢
- 7) 国土交通省（2007）都市公園の整備現況
- 8) 財団法人日本体育協会（2005）公認スポーツ指導者テキスト共通科目 I
- 9) 笹川スポーツ財団（2006）スポーツ白書～スポーツの新たな価値の発見～
- 10) 笹川スポーツ財団（2006）10 代のスポーツライフに関する調査報告書「青少年のスポーツライフ・データ」
- 11) 菅原哲朗（2000）ジュニアスポーツと安全
- 12) 杉山尚子（1998）行動分析学入門
- 13) 全国国公立幼稚園長会（2007）幼稚園児の外遊びに関する調査報告書
- 14) 高梨智弘（2000）図解わかる！ナレッジマネジメント
- 15) 馬場宏輝（2008）保護者の運動・スポーツ実践と意識が子どもの体力向上に与える影響に関する研究. 仙台大学紀要 2008, Vol.40, No.1, pp.97-110
- 16) 丸山富雄（2000）現代スポーツ論
- 17) 森川貞夫・佐伯聰夫（1989）スポーツ社会学講義
- 18) 文部科学省（2004）我が国の体育・スポーツ施設—体育・スポーツ施設現況調査報告—について
- 19) 文部科学省（2006）スポーツ振興基本計画（改訂版）
- 20) 八代勉・中村平（2002）体育・スポーツ経営学講義
- 21) 山本清洋（2005）子どもスポーツの意味解釈